

# てすさ 手遊びカフェへようこそ

日下部雅生

## 東日本大震災被災地での京都市立芸術大学学生の活動報告

三・一一の震災から半年後の9月中旬、もうこのような取り組みを行なわせて頂けるかと満を持し、京都市立芸術大学の学生17名、教員4名で被災地へ行って参りました。

被災地で行なうのは、「手遊びカフェ」。災害で地域の集会所や共同作業所が失われたり、仮設住宅などの新たなコミュニティが出来上がっていく状況の中、人々が気軽に集まれる場所を作り、そこで手遊びを通して情報交換や気分転換、あるいは暇つぶしや軽作業をする事で、少しでも気分を和らげたり、ストレスが発散出来るきっかけを創出するのが目的です。

### ■手遊びカフェとは：

今日私達が携わっている工芸では、産業でも芸術でも何かを作り上げる事を目標にしています。でもそれ以外に第三の工芸の在り方として、その行為自体に意味を求める事が出来るのではないかと？ 手遊び、あるいは手慰みとは手でする慰み。退屈を紛らわすためにする手先の仕事。暇つぶし、気晴らしなどの目的で行われる他愛もないことの総称。手遊びする事で気持ちは和らぎ、手遊びする事でその場に長く居続ける理由が出来ます。そんな研究の実践として、被災された方々の慰めに工芸的な手遊びを役立てて頂こうと考えたのです。

今回の「手遊びカフェ」は、京都市立芸術大学学生達の全学的な取り組みである緊急時の共有スペース「コミュニティ・カフェ」の研究（美術科彫刻専攻が指導）に、工芸科を挙げたこの手遊びの研究をソフトとして合体させた、言わば空間と行為を組み合わせたプロジェクトなのです。

### ■手遊びカフェの準備

まず6月末から7月にかけて、教員が現地へ活動の下準備と打ち合わせに伺いました。場所は宮城県白石市・大川市・石巻市・女川町などで、教員の一人が以前からアート活動でお世話になっていた現地の方々との結びつきで、活動場所が決まってきました。

カフェの開催だけでなく、学生達は被災地に残る手技の見学や災害自体の見学、カフェ開催地の一つであるコミュニティケアハウス「穂波の郷クリニク」のスタッフが、地元中学校で行う特別授業「いのちの授業」のお手伝いも行ないます。また私達が帰った後もコミュニティ・カフェが存続するように、手遊びカフェに準備したテーブル、ベンチやパラボル、カフェの食器や手遊びの道具類はそれぞれの開

手遊びカフェの参加メンバー



東北キャラバンの車



催地に寄付していきます。

そんな活動内容が固まったのは、大学が夏期休業に入る寸前。学生達は夏休みの様々な計画が既にあったかとも思いましたが、早速参加者を募集、具体的な活動の準備が始まりました。

17名の現地へ行く学生以外に、どうしても予定がつかないので、準備だけでも手伝いたいと言ってくれる学生も多数集まってくれて、現地に寄付するカフェの什器類の製作、カフェで使う保存や手作りにこだわった食材も用意します。

また手遊びの準備として、洋裁学院を主宰し、今回の震災にあたって早い早く様々な針・糸・布を通した活動を始めておられた柴田美穂子さんにご指導頂き、参加学生達がこぎん刺しの技術を習得したり、型染やステンシルの型紙を制作したりとソフト部分の準備も行いました。

私達教員はそれ以外に、限られた予算内で学生が乗るバスの手配や宿泊地の選定、現地での活動の段取りや重たく高張る什器の運搬など、様々な事務作業に忙殺されました。

正直に言いますと、京都を出発した時には、半分以上の仕事は成しえたような思いさえ抱いた程です。

### ■手遊びカフェ東北キャラバン出発

宿泊は行き帰りの車中泊を挟み、東松島市のキャンプ場で4泊のテント生活です。これは経費の問題も当然あるのですが、学生達にキャンプという自分達の生活を一から作り上げ、維持しなければならぬ経験をさせたかった事と、現実として復興に携わる方々の宿泊で、現地で営業している宿泊施設も満



女川町の手遊びカフェ、Tシャツへのワンポイントの染め



女川町の手遊びカフェ。教えるつもりが教えられ...



穂波の郷クリニックでの手遊びカフェ

②手芸体験 ーこぎん刺しのくるみぼたん・ティッシュケース・コースター

被災地に対して縫うことを中心にさまざまな活動をされている、柴田洋裁学院の柴田美穂子さんにご指導頂いた「こぎん刺し」で、初日は柴田さんと共に、そして二日目は学生達だけで、くるみボタンやティッシュケースを作るコーナーを開きました。

最初は学生達が来られた方に刺し方をお教えするのですが、方法を理解されるとやはり年上の女性にはかきません。これなら大丈夫と楽しげに手際よく、凝った模様を刺していけます。「参りました！」と学生達。

③漆加飾体験

漆工の教員がまず取り組んだのは、下準備で訪れた女川町の瓦礫の中から拾い上げた器の金接ぎ。震災で割れてしまった器を接ぐ作業は象徴的でした。

手遊びカフェで行なった加飾体験は、染織とのコラボレートもありました。お客さんのご要望に合わせて、即興で切り抜いた型を使って金箔を押したり色を付けたり。

ベースの塗りの器の数々は、今回の取り組みに共感して下さった、福井の越前漆器の会社からご提供頂いたものです。

④ SENDAI (仙台・運ぶ愛) 銅のバラ作り

こぎん刺しをご指導下さった柴田美穂子さんのお友達で、仙台市の御銅師・田中善氏がこの活動に共感して下さり、2日間、私達と同道して銅のバラ作りのコーナーを出して下さいました。銅の板を丸く切り抜いて、手で丸みをつけて重ねていく銅のバラ、同じ型から切り抜いているのに、作る人毎に全く表情の違うバラが出来上がっていくのが不思議でした。

⑤万相談

今回の手遊びコーナーでもっともユニークだったのがこのコーナーです。

男子学生が中心に、修理、リフォーム、何でも受付のDIYコーナー。不便な仮設住宅の生活で、道具があれば修理したい、付け加えたい、形を変えたい等々、いろんな想いがあるのでは?と持ち込んだ

杯状態であった事もまた事実です。

そんな訳で手遊びカフェの本番は、学生が乗る大型バスと、教員が3台の車にカフェの什器類とキャンプ道具を満載して東へ向かう、まさに東北キャラバンとなりました。

■手遊びカフェのお品書き

手遊びのメニューは以下の通りです。これらのメニューが通常の工芸(手芸)教室やワークショップと違うのは、何となくカフェにお茶を飲みに来た人達が、何となく暇つぶしをしてみる、手を動かしてみるといった程度に抑えるところです。つまり頑張ってもらってはいけない、もちろん夢中になるのは良いのですが、そこが正に難しいところです。

①染織体験 ーステンシル・捺染

7月、今回の取り組みの下準備で訪れた宮城県女川町門前の仮設住宅全世帯に、(株)田中直染料店のお力添えで学生の手染め暖簾をお贈りしました。その事をきっかけにこのコーナーは最初に決まりました。

夏に向かう中、とにかく大急ぎでお送りした暖簾に、それぞれ使って下さっている方のインシヤルや、ワンポイントを入れる事から、その場でTシャツやハンカチへのポイント入れなども出来るのではないかと準備しました。今回の材料もまた、(株)田中直染料店にご協力を頂きました。

電動工具や大工道具、相談にいられた方々と、手遊びを遙かに超えるような大仕事もこなしていました。

⑥手遊び喫茶

手遊びカフェでは手作りの飲み物や軽食を用意して、ゆったりとくつろいでお話しをし、そして気が向けば手を動かして頂く、そんな流れが大切ですからカフェ部門は重要です。

保存食、手作り、自然食品などをキーワードに、今回の取り組みに沿ったメニューでしたが、これが普通の喫茶店のメニューより美味しい事が、何か大切な事柄を含んでいる気がします。

■次へと繋がる活動

さまざまな方々のお力添えで無事に1回目の活動を終える事が出来たわけですが、手を動かして気を紛らわせて頂くという今回の取り組み、実際に現地に赴いて感じたのは、心の復興はそれぞれの方の被災の状況や置かれた立場、個々の性格によってさまざまであるという事でした。ただそのような状況下でも被災地の方々に教えられ、助けられ過ぎた一週間であった事に間違いは無く、被災されてなお失われぬ、東北の人々の懐の深さにあらためて頭が下がる思いです。

何かをしてあげるのではなく、こちらがいろいろ勉強させて頂く事を基本とした今活動でしたが、今学生たちのレポートを読む限り、彼らには本当に勉強になったと思っています。

1回目としましたのは、この取り組みは継続していくものであると考えるからです。さまざまな出会いもあり、また学ぶべき事柄もどんどん出て参りましたが、それらをきっかけに始まった事、分かった事もたくさんあります。

一過性の取組みではなく、東北へと繋がった糸が切れないよう、細く長く考えていけたらと思っています。

日下部雅生(くさかべまさお)

京都市立芸術大学准教授 染色作家